

2012年3月5日

京都会館再整備に関して市民・団体から寄せられた意見のご報告とお願い

「京都会館を大切に作る会」と「京都会館再整備をじっくり考える会」では、「京都会館再整備に関する要望書」を作成し、この計画に対して広く市民に意見を募って参りました。これに対して、現時点までに1432名の賛同が寄せられておりますので、ご報告申し上げます。また、同時に、文化人に対して、この問題に関するメッセージを募集しましたところ、57名の文化人から賛同のメッセージが寄せられておりますので、是非お読み下さるようお願い致します。

上記要望書とは別に、京都会館再整備をじっくり考える会では、「音楽と舞台芸術を愛する立場から京都会館再整備基本計画を憂慮する声明」を作成して意見を募りました。こちらは意見を募り始めたのがごく最近のことではありますが、現時点までに、107名から賛同が寄せられておりますので、ご報告申し上げます。

この計画に対しては、京都で文化芸術活動を営む団体によって構成されます京都文化団体連絡協議会からも見直しの声明が上がっております。京都文化団体連絡協議会の構成団体には、京都会館の長年の利用団体も含まれております。

同じく、新建築家技術者集団からも、計画の問題点を解き、白紙撤回を求める見解が出されております。

本年1月6日には、「京都・まちづくり市民会議」、「岡崎公園と疏水を考える会」、「京都会館を大切に作る会」、「京都会館再整備をじっくり考える会」、「左京まちづくり連絡会（「北泉通りの架橋・拡幅を考える会」、「北泉橋を考える会」、「松ヶ崎の住環境を考える会」、「旧高野合同福祉会館の売却問題を考える会」、「新日本婦人の会左京支部」、「左京地区労働組合協議会」、「初代左京区役所に文化施設を要望する会」、「吉田・区役所移転問題を考える会」によって構成される協議会）」の5団体が合同して、1月6日時点で合計7600筆の京都会館再整備計画に疑問を提示する署名を、京都市に対して提出しております。

さらに、本年1月29日には、毎年「市民が選ぶ文化財」を選定している「京都の近代建築を考える会」が、第9回「市民が選ぶ文化財」として、京都会館を選定し、顕彰式を行いました。

以上の状況を鑑み、専門家が疑問を提示し、市民からも多数の反対の声が挙がっているこの計画を、ご再考くださるようお願いいたします。

添付資料

京都会館再整備に関する要望書（筆数 1432 名）

京都会館再整備に関する文化人メッセージ（57 名分）

音楽と舞台芸術を愛する立場から京都会館再整備基本計画を憂慮する声明（筆数 107 名）

京都文化団体連絡協議会による要望と声明

新建築家技術者集団による見解

5 団体合同の要望・署名の提出に関する報道

「市民が選ぶ文化財」顕彰状と賞の説明

以上

京都会館を大切にする会 代表 吉村篤一

京都会館再整備をじっくり考える会 事務局 西本裕美

連絡先 090-3926-4329（西本） jikkuri.kyoto@gmail.com

賛同署名のお願い

-「京都会館」のより良き明日を考え、再整備計画を見直すために-

- 呼びかけ団体 : 京都会館を大切にする会・京都会館再整備をじっくり考える会
- 呼びかけ人 : 吉村篤一・前田忠直・長瀬博一・山崎泰孝・松隈洋・志村公夫・斉藤昭彦
・若林広幸

■ 署名主旨文

「京都会館」は、京都の戦後復興の象徴であり、市民のための公会堂として、高山義三市長のリーダーシップの下、建築家・前川國男の設計によって1960年に開館した複合文化施設です。その後、半世紀にわたり、岡崎地区の風景の一部として市民に親しまれ、合唱コンクールや吹奏楽コンクールなど、市民の文化活動の拠点として幅広く活用されてきました。また、優れた建築として、1960年度の日本建築学会賞と建築年鑑賞を受賞し、近年では、DOCOMOMO Japanにより日本の近代建築100選にも選ばれて海外にも広く紹介されるなど、高く評価されています。

しかし、2011年6月、京都市は、「京都会館再整備基本計画」を策定し、公表しました。その内容は、2000席の第1ホールをすべて取り壊し、世界的なオペラを誘致できる舞台をもつ劇場に建て替えるなど、建物の半分以上をつくりかえようとするものです。

こうした計画に対しては、京都市長あてに、日本建築学会長やDOCOMOMO Japanから、いち早く保存要望書も提出されました。けれども、計画は何ら変更されることなく、6月下旬には、極めて限られた設計者しか参加できない形で建物の基本設計者を決める公募が行われ、8月1日に締め切られました。けれども、応募者が皆無だったため、応募資格条件を大幅に緩和して、9月12日まで再公募が行われ、先ごろ基本設計者(香山壽夫)が選定されました。この後すぐに、基本計画に沿った基本設計が始まる予定です。

そもそも、今回の計画の決定については、その経過が不透明であり、市民にはまったく公開されていません。このままでは、建物の価値が大きく損なわれ、巨大な舞台の建設によって落ち着いた周囲の景観も破壊され、市民のための公会堂として建てられた建物の性格も失われてしまいます。

そこで、私たちは、「京都会館」を大切に思う立場から、次のような要望書を提出します。長く市民に親しまれてきた「京都会館」の建築的価値と周囲の景観を守り、より良いかたちで保存改修されることを求めるこの署名にご協力ください。

(裏面につづく)

■ 「京都会館」再整備に関する要望書

京都市長殿

私たちは、2011年6月に策定された「京都会館再整備基本計画」が、次の要項を満たす内容のものへと改定されることを要望致します。

- 1) 現在の建物がもつ建築的価値の尊重を前提とする保存改修であること
 - ①中庭と第1ホールロビーを中心とする開放的で伸びやかな内外の空間構成
 - ②疎水沿いの景観に配慮したホール屋根の形状と水平庇との調和
 - ③時間の中で成熟する素材と構法の扱い方
- 2) 東山を望む岡崎地区の特徴である豊かで落ち着いた景観を守り育てる計画であること
- 3) 市民と利用者の意見を反映した計画とすること
- 4) 開館当初の理念に立ち返り、市民のための「生活道場」であり続ける施設内容とすること
- 5) 建設ための財源確保については、以上のような視点を堅持できる適切な方法であること
- 6) 再整備後の運営計画についても十分に検討し、将来にわたって無理のないものであること
- 7) 基本設計、実施設計、施工については、以上の意見を反映するに十分な時間的余裕を設け、それら全体を監修し、より良い改修を実現するために、専門家による中立的な委員会を設置すること

No.	お名前	ご住所※ご住所は都道府県名からお願いいたします。
1		
2		
3		
4		
5		

■ Web 署名も実施しています→ <http://uses-it.org/> 「活かして残そう日本の建築物。」

□ 問合せ先：京都会館を大切にする会 HP：<http://kyotokenchiku.blogspot.com/> / mail：kyotokaikan.taisetu@gmail.com

□ 署名後の送付先：〒602-0903 京都市上京区烏丸通今出川下る観三橋町 562-6 建築環境研究所

「京都会館を大切に作る会」賛同者からのメッセージ

■青木淳(建築家)

建築の価値は、そのデザインボキャブラリーそのものにあるのではなく、そこに、それらをひとつの建築にまとめあげる構文、あるいは文法が加わることで初めて得られるものです。京都会館の場合、コンクリート打ち放しの庇と柱、レンガタイルという素材は、デザインボキャブラリーにあたるもので、それだけを踏襲しても、それはかえって、表面的な面従腹背にしかありません。それらのデザイン上の語彙を使って、ひとつの「京都会館」としての世界にまとめあげる文法は、京都の町並みや東山の景観との調和にむかう水平線の強調と、1階まわりに、室内室外にわたって、ゆったりと広がる「禅寺のもつ素朴ではあるが力強い荘厳」の感覚の横溢だからです。今回、「国内最大級のオペラハウスに衣替える」ための大改築が行われるとのことですが、その計画案を見るかぎり、それは今、書いたような意味で、まさに面従腹背の改築案と言わざるをえず、古い町並が残る京都に、それと調和するように、新しく大きな建物をつくるという非常に困難な仕事に対して、深い洞察を経て生み出された、その後の京都の現代化の方向に、ひとつの規範ともなる文法のあり方を破壊するものと考えます。

■芦原太郎(建築家, 日本建築家協会会長)

環境や文化の継承を担う、建築の価値を大切にしてください。

■在塚礼子(元・埼玉大学教授)

“市民のための会館”という思想と建築を受け継ぐ「京都会館を大切に作る会」の活動に賛同いたします。

■五十嵐淳(建築家)

時の蓄積を大切に！！

■今川憲英(外科医的建築家, 東京電機大学教授)

直接活動が困難ですが、可能なかぎり支援します。

■宇波彰(評論家, 哲学者, 元・明治学院大学教授)

京都会館は単なる建造物ではありません。そこには、前川國男という思想家でもあった建築家の思想が内蔵されているのであり、これを壊すことは、前川國男の思想そのものをも消してしまうことになります。断乎として私はこの暴挙に反対いたします。

■延藤安弘(建築家, 愛知産業大学大学院教授)

京都会館は、京のまちの歴史的景観・自然環境・市民的記憶等の連続性の中に、その生命を生きつづける存在である。世代から世代の建築的生命が創造的に持続するために、建築専門家のみならず幅広い市民的運動が育まれることを期待します。

■奥平耕造(建築家, 元・前川國男建築設計事務所社員, 東京工芸大学名誉教授, 「東京文化会館」設計担当者)

1. 京都市「京都会館再整備基本計画」策定委員会の代表を含めた「シンポジウム」の開催を提案します。その際、京都の文化的歴史についての基本的な認識を問うこと。2. 1.のシンポジウムを、マスコミ(大新聞及び地方紙)の文化欄に、活字として記録に残すことを提案する。3. 京都市に対して、原設計者(前川國男)の後継者(現前川事務所)の意見を聴くべきことを提案する。現事務所の代表者は、意見を表明すべきと考えます。4. 文化運動を盛り上げるためのあらゆる活動を継続されることを希望します。

■奥村昭雄(建築家, 東京芸術大学名誉教授)

京都市民が風景とともに慣れ親しんでいる京都会館は、そのままの形で使い続けてほしい。となりの町に大きいホールがあるならば、それでいいではないか。

■神谷宏治(建築家, 日本大学名誉教授)

現京都市長の方針に大反対です。しかし、市長が在職する限り、彼の方針は変わらないでしょう。とすれば、リコールしか対策はないのかも知れません。市民がこの件に関心を持つかどうか分かりませんが。

■川上玲子(インテリア・デザイナー, 元・前川國男建築設計事務所社員, 日本インテリア・デザイナー協会理事長)

前略 先週、京都でタクシーの乗った際、京都会館の前を通りましたら、運転手さんが「この建物は、もうすぐ取り壊されるんですよ。日本人は、文化の必要性がわからないですね」と話していました。本当に文化面の考え方に問題を感じます。絶対に保存すべきと思います。

■黒木実(建築家)

何故とまた問わなければならない、淋しさ、悲しさ。またひとつ時の流れが作った輝やかな空間が壊されようとしている。秀れた空間は人々に秩序と安心を与えてくれる。「京都会館」の破壊は文化と人々が培ってきた精神の破壊である。正に超暴力的行為と言える。

■小嶋一浩(建築家, 横浜国立大学大学院教授)

日本では、どうしていまだに、都市の記憶を世代を超えて引き継いでいくというあたりまえのことができないのか？学生時代を京都で過ごした者として悲しくなります。先日初めてブラジルに行ってきましたが、1940年代～60年代竣工のニューマイヤー他の建築家による作品群は、たいへんいきいきと使われていました。そこではたかだか築50～60年は、「保存」という議論のはるか手前のように思われました。日本にも文化や市民社会があることを京都会館の在り様で示したいと考えます。

■齊藤祐子(建築家)

建築は、時代精神を具体的に経験する現実をとおして、次世代へと伝える大きな役割を担っています。けれど、経済の波に押されて、次々と建築が姿を消しています。日本では、3月11日の東日本大震災を経て、現在私たちは復興へと動き始めています。そんな時こそ、関東大震災復興時の志や戦災復興時の精神が、大きな力となるはずです。市民活動のための文化的拠点として、また、都市景観のあるべき理想をここにつくりあげた(京都会館)を本来の姿で、次の時代へとしっかりと伝えていくことを望んでいます。

■篠田義男(建築家, DOCOMOMO Japan メンバー)

京都会館が持っていたのは(いるのは)、戦後の明るい、透明な精神の在り様ではないかと思います。たくさんの市民の「よい音楽」を京都で楽しみたいと云う明確な意志が、クライアントである市長を通じ、前川國男とのゆるぎない信頼の中で、岡崎の拡がりの中での美しい建築群として誕生したのだと思います。今回の「ローム社」は、その様な“ゆるぎない信頼”とは全く別のプロセスから出て来たもので、京都会館の最も根本的な哲学が根本から失なわれます。元々想定されていないオペラ機能を追加する事は、その成立の哲学から考えても無理な事です。京都が京都として存在する瀬戸際です。皆様の努力に敬意を表します。

■篠原修(土木設計家, 東京大学名誉教授, 元・政策研究大学院大学教授)

前川國男の建築は日本の近代建築の原点であり、日本の近代建築が世界の水準に肩を並べたことを証明するものでもあります。又、前川の建築は商業主義に流れる昨今の建築の傾向に棹さして、人間と都市に貢献することを表す建築の良心でもあります。日本の近代建築の原点の保存を。

■白井昱麿(建築家, 白井晟一研究所代表, 建築家・白井晟一子息)

趣意書に同意いたします。京都は自分たちの歴史にアイデンティティを持つ、日本の中で珍しい都市であると思っています。京都会館がその歴史を形成しているものの一つであることへの理解が膾炙することを望んでいます。

■陣内秀信(建築史家, 法政大学教授)

日本の、そして世界の大切な古都、京都には近代の輝かしい歴史もあります。前川國男の京都会館は、京都の歴史的環境・文化・風土に見事にマッチして、近代の輝きを加えた素晴らしい建築作品です。この建築が受け継がれ活用されることは、未来の京都にとって極めて重要だと考えます。

■鈴木博之(建築史家, 東京大学名誉教授, 青山学院大学教授, 明治村館長, DOCOMOMO Japan 代表)

京都会館の原型が保たれることを要望します。疎水に面したシルエットは、景観を深く意識したものであり、内部のロビー空間と対応して、この場所に対する建築家の解釈が示されていると思います。歴史的建築の保存のためには活用は必要だという理屈のもとで、無理解な改変、改悪、破壊は行なわれる例がしばしば見られます。京都会館はまさしくこの危機に直面しています。建築家はしばしば自分はデザインを理解しているから、より良いものにできると自信たっぷりに発言します。けれど、そうした行為がより良い結果に結びつくことは、殆どありません。19世紀英国のJ.Wyattという建築家はそうした改造をくりかえし、the Destroyerと仇名されましたが、京都会館も破壊者の手にかかろうとしています。

■仙元隆一郎(同志社大学名誉教授)

古都の美観は、細心の注意と断固たる決意を以って保持発展されなければならない。パリやローマの例は、そのよき範である。金を出す者に迎合して、簡単に高さ制限の例外を作る愚は、許されるべきではない。京大の積貞棟も同様である。特に、左京の岡崎は、永年先人が意を尽し、美観を築いて来た歴史的遺産であり、市の猛反省を促したい。ロームも亦同じ。

■高橋純一(建築家, 大阪芸術大学名誉教授)

いろいろお世話様です。どうか宜敷く御願い致します。

■瀧光夫(建築家, 元・福山大学教授)

1)「京都会館」は、東山の古寺や平安神宮などとともに、昭和期の代表的な創作物として、有効利用をしながら大切に保全してゆくべき文化財です。2)現在のホールを改造して“世界的なオペラに対応するオーデトリウム”に変身させることは、不可能・インポシブルです。今の庇や並木をコフしたぐらいではおさまらないスケールが必要となる筈だからです。3)北山通り、植物園東に“京都コンサートホール”があります。これに隣接する「総合資料館」エリアにしかるべき「オペラハウス」を新築することを提案します。「京都オペラハウス」と「新・資料館」をコンサートホール(イサザキの名作・国際級)や植物園(花・緑・水)と関連づけながら、各々が渾然一体となった高質の空間・エリアを創出するのです。JR 京都駅から地下鉄ですぐの場所。京都だけでなく近畿圏いや主都圏までも視野に入れて構想すれば、世界に通用する空間・環境づくりが可能であると信じます。

■戸田潤也(建築家, 近畿大学准教授)

京都会館は学生時代によく行ったので、なつかしいです。がんばってください。

■富永讓(建築家, 法政大学教授)

<理不尽に歴史や記憶のよりしろを消去してしまうことのやりきれぬ悲しみを、私たちは、3.11 で経験しました。理不尽な消去を人為的に行うことは、未来から今みると、きっと取返しのつかぬ愚行に映るでしょう>同時期に建った私の勤務する法政大学の55・58年館も同じ事態に当面しています。その抗議のパンフレットのなかに、上のような章句がありました。京都会館は前川國男の優れた作品という以上に、内外に豊かな空間性を示し、いつ訪れても、ゆとりを感じさせ、京都にありうる日本的な場所を示す数少ない建築です。

■内藤廣(建築家, 東京大学名誉教授, 「虎屋京都店」設計者)

我が国では、何か困ると「世界」を持ち出すクセがある。「世界的なオペラ」とは何か。舞台設備が整っていれば「世界的なオペラ」が可能なのか。もとより、音楽は形式や規模ではなく、あらゆる芸術がそうであるように心や精神を抜きにしては語れない。前川國男は、芸術の心と精神が生まれる、あるいは交流する場を設計したのだ。それは無二のものであり、機能論や利便性を超えている。それ故、安易な機能論で改築することには反対する。

■中村拓志(建築家)

もはや「京都会館」は京都の風景である。

■永田祐三(建築家)

名建築を安易に壊してはならない。傷んでいるところは修理すればよい。欧米の建築は修理して大切にされている。IT然り。パウハウス然り。そうやっていかないと、町も、人も、記憶喪失になってしまう。

■西沢大良(建築家)

取り壊してはダメです！野蛮です！

■西村征一郎(建築家, 京都工芸繊維大学名誉教授)

一市民として御礼申し上げます。次第に追いつめられた様子が聞えてきます。私が建築を志した基点とえば、多少感情的な意見になるので、単なるノスタルジックな擁護はさておき、市の態度は全く理解できない。

1. 金がないから、スポンサーの言いまは？ 2. 現代建築で市がイニシアティブを取った例、伝産館→みやこメッセ、京都駅、古くは京都タワーと、京都会館の一般市民(プロは常識的判断済)の評価をとったら如何？(京都市の文化レベルの問題) 3. 17もの寺社が代表する、世界文化遺産に現代で対応できる建物。(古都京都の文化遺産) 4. 市長(門川氏)が“ネロ皇帝”にならないことを祈ります。(公共性、イージーな着物主義) 5. 都計の市民委員に落選しましたが、請求しても審査報告がない(立派な方が選出されたのでしょ)。今でも、不都合な恐れを、公開できない役所。

■橋本健治(建築家, 「大阪市中之島中央公会堂」改修工事担当者)

一企業からの寄付と公共施設の命名権の売買という手段を口実に、優れた公共財である「京都会館」の独自性と立地環境性による総合的な存在価値を、行政が独断専行的に損なう行状は、世界に名を馳せる京都の都市格が疑われることになる。

しかも、オペラのためという過大な舞台空間の大改造は、世界の諸都市における文化施設のあるべき方向性から逸脱し、地域における常用運用にとってもむしろ支障となる。創建当初の志とこれまでの蓄積の尊重保全を前提に、現有施設をより活用する目的と手段にこそ、この提供資金を投入すべきだ。世界に、京都の誉れを損ねる暴挙は避けなければならない。

■長谷川堯(建築評論家, 武蔵野美術大学名誉教授)

京都会館は、前川國男の数多い作品中でも白眉とも言うべき、きわめて完成度の高い建築だと確信しています。しかも竣工以来、長い時間の経過の中で、京都の都市景観の中に見事に同化、定着しており、岡崎の美しい街並に、いまや欠かせない重要な建築的要素となっています。またかりに、京都市がオペラ劇場をどうしても必要としているなら、別の場所で適当な敷地を探すことから始めるべきでしょう。いずれにせよ、必要とされる修復以外に、京都会館に、大きな改変の手を加える企画には、強く抗議し、反対します。

■花田佳明(神戸芸術工科大学教授)

「形あるものはいつか消える。残るのは記憶だけだ」という言い方がありますが、私たちが暮らす街や村に関しては、「形あるものが消えると記憶も消える」と言うべきです。従って、京都という都市の歴史と文化の記憶を継承するために、現在の京都会館が作り出した風景の改変によって失われるものについても、可能な限り慎重で知性に満ちた判断と提案がなされる必要があると思います。

■藤井恵介(建築史家, 東京大学教授)

“建築文化”がいかに理解されていないのか、怒りを越えて悲しくさえます。しかし、事件を乗り越えるたびに建築文化が広く認知されるようになるので、頑張りどきであることも確かです。何とかしましょう！

■藤岡洋保(建築史家, 東京工業大学教授)

京都会館の件、憂慮すべき事態に至ったようですが、よろしくお願ひいたします。そもそも、あの場所に高層建築は建てられるのでしょうか。あるいは建てていいのでしょうか。要望書では、京都市における岡崎公園の意味、それも京都の近代を象徴する場であるという意味についても言及していただければ幸いです。

■藤木隆男(建築家, 元・芝浦工業大学特任教授)

京都の魅力は、山々に囲まれた水と緑の自然景観と、1200年余の歴史が堆積された街並み、建造物群、宗教・芸術・文化・人々の暮らしが織りなす奥深く複雑な様相にあると考えます。前川國男の京都会館は、南禅寺水路閣や平安神宮などと共に、既に古都京都に欠かせぬ意味をもって存在しています。それは1970年代の建築家の絶頂期につくられた記念碑的傑作であるばかりか、疎水をめぐる優れた景観地区の形成という場所性を備えています。是非不用意な手を加えず現状のより良い保存の中に、名作が活かされて欲しいものです。

■藤森照信(建築史家, 建築家, 東京大学名誉教授, 工学院大学教授)

前川さんの受賞の言葉のラストが興味深かった。カンパはどこに送るのですか？

■松岡拓公雄(建築家, 滋賀県立大学教授)

京都会館の取り壊しは、京都近代文化の破壊と同じです。歴史的な建造物を守ってきたように、現代の遺産を守るべき。三十三間堂や銀閣寺を取り壊すのと同じ行為であることに気づくべきです。

■松村慶三(建築家, 浦辺設計代表)

・京都の人達は京都の地で本格的オペラを見ることを本當に熱望していますか。・当該地の景観を損ってでも、あの場所に固執していますか。・今の国家の非常的なときにあえて今、作るのですか。いくつかの疑問があります。大震災後日本の価値感は大大きく変ろうとしています。新しい価値感で見なおすことが最も求められていることでしょう。

■松山巖(作家, 評論家)

信じたなら、筋を通そう。

■三井所清典(建築家, 元・芝浦工業大学教授)

京都という都になぜオペラハウスが必要か、私も理解に苦しみます。関西圏に1つか2つ、大阪か神戸にあれば十分と思いますが、いかがでしょう。すでに滋賀にもあることを配慮すべきです。同種のを各都市がもつ必要はなく、機能を分担して、それぞれ素晴らしい施設にすることを希望します。京都にふさわしい施設を京都の人が外部の意見も聴いて決めて下さい。京都会館を大切にすることを賛同致します。

■三浦展(評論家)

今年震災前日、いや当日(あ、やはり前日でした)京都会館を初めて見ました。思った以上に素晴らしく、あれをこわすのは武道館をこわすとか、(良い例ではないかもしれませんが)何か日本をこわす気すらします。

■ 三上祐三(建築家, 元・前川國男建築設計事務所々員, 「シドニー・オペラハウス」に設計参加, 「東急文化村オーチャードホール」設計者)

現存する京都会館は、所在地周辺の都市景観の中できわめて重要な役割を果たしています。その主要部分をとりこわして、巨大なステージタワーを持つオペラ劇場に建てかえようという京都市の計画は、建築的にも非常な無理があるだけではなく、都市景観の保全という市民的な観点から見て全くの暴挙であり、強く反対します。

■ 南一誠(芝浦工業大学教授)

京都会館は私の家族にとっても思い出深い建物です。私事で恐縮ですが、昨冬他界した父が演劇が好きで、生前京都会館で開催される催しに欠かさず通っていました。家から歩いて行ける京都会館は年老いた父が終生、愛した場所でした。京都会館の姿は実家の居間の窓から良く見えます。母はホールの姿を見て、父のことを思い出しています。父と長年通った京都会館がなくなってしまうかもしれないと聞き、母は何とも言いようがない寂しさを感じています。思い出が蓄積された建物が、一つまた一つと消えていくことは、年老いたものにとって、耐えがたいことです。ヨーロッパにあるオペラ劇場が長い歴史を有し、改修されながら大切に継承されていることを考えると、京都会館の再整備計画は不自然さを感じます。舞台や舞台機構が標準化され、世界中どこでも同じ演出で上演できなければいけないのでしょうか。箱に合わせた演出をすることはできると思います。もっとも、どれほど多くの人が、京都会館でオペラを見たいと思っているか分かりません。中京郵便局は建替えるための設計が終わっていたのですが、それを破棄して外壁保存しました。

■ 村井修(建築写真家)

京都会館は、前川先生の傑作の一つだと思います。頑張ってください。

■ 森まゆみ(作家, 編集者)

わたしは東京に育ち、上野の東京文化会館に子供の頃よく行った。コンサートや友だちのおさらい会で。そのときその空間の質から受けた深い印象が今の自分の建築を考える大きな根っこになっていると感ずる。のびやかさ、不思議さ、美しさ、緊張感、手触り、厳粛さ、喜び、前川國男から無言のうちに建築教育を受けた。京都会館も半世紀にわたり京都市民に無言の建築教育を施していたはずだ。これほどの質の空間をこわしていいはずがない。

■ 八木幸二(建築家, 東京工業大学名誉教授, 京都女子大学教授)

歴史的遺産、文化的遺産を日本で一番大切にしている(ハズの)京都が、まさか、美容整形まがいの外科手術をする気だとは心外である。京都会館の真の生みの親について、設計者の前川國男は、当時の市長、建築課の担当者、京都市民であったと言っている。時を経て、再び、市長、担当者、市民の力で、豊胸手術ではなく、真の再生をして欲しい。

■ 矢萩喜徳郎(建築家, デザイナー)

農業をアグリカルチャーと呼ぶなら、カルチャーを示している文化の維持も、実は丁寧ケアして成り立つ稲作に似ていると感ずる。意識する力がなければ消失されていくようなものに眼差しを注ごうとすることに敬意を示したい。

■ 山口廣(建築史家, 日本大学名誉教授, 元・日本建築学会副会長)

かつて滋賀県立美術館にある建築家の展覧会を見に出かけた折、翌日すぐに帰宅せずに京都会館に回って見た。現地で眺めてみるとあちらこちら可なり痛みが目立つ。全部調べたわけではないが、階段や軒周り、窓枠や床など痛みが目につく。どうして小まめに手入れをしないのだろうと、物思いに耽りつつ歩いて居る内に四条大橋の袂に出てしまいあわてて車を拾って京都駅に出、新幹線で帰宅したが、ずっと京都会館の哀れな姿が脳裏から消えなかった。一介の史家にはどうする力もない。本当に残念に思った。以来、京都会館のことはずっと気にかけておりました。やっとな機が熟し動きが始まったのですね。成功を期待しております。85歳老。

■ 湯本長伯(九州大学教授)

京都国立博物館(新館)も、二者択一の論理で簡単に失われてしまいましたが、文化(財)というのは、「どちらを選ぶのか?」というような論理で、生かしたり殺したりするようなものではないというのが、私の考えです。京都は最も革新の気に満ちた都で、さまざまな新しいものを取り入れながら、千年の歴史を積み重ねて来ました。しかし昨今の更新ブームは頂けません。良いものをきちんと残し守って行く、これが京という都にとっても、アイデンティティを守ることだと思います。頑張ってください。応援致します。

■ 横河健(建築家, 日本大学教授, 元・日本建築家協会副会長)

こういった問題はここで初めて問題視されることでもなく、何回となく繰り返されて来たあげくに社会的な記憶の回路が失われて常にリセットされることとなる。問題は、首長あるいは議会あるいは行政の共同正犯に一同、罪悪感を持たないことである。むしろ、新築のリセットが良いことと考えている点にある。こういった問題は、又、教育の問題に帰結することが多いのだが、やはり、首長以下行政の方々の教育が必要となる。彼らの教育程度は非常に高く優秀な方々である、にもかかわらず、こういった結果がもたらされるのは知識ではなく、文化的教養が十分と言えないからだ。良く言われる「頭の良いおばかさん」という所故である。いずれにしても、市民にとっての社会資産を守る「社会システムの回路」が必要なのだ。

■ 米山勇(建築史家, 東京都江戸東京博物館研究員)

町と人をとりこむ力をもった京都会館は、前川國男の最高傑作だと思います。

■ 渡邊研司(建築史家, 東海大学教授, DOCOMOMO Japan 事務局長)

前川國男の文化ホール設計の模範としたロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホール(1951年)は、2009年にほぼオリジナルを残し、見事に再生した事例である。であるならば、京都会館も再生する道は十分にある。50年間、音楽ホールとしての歴史を尊重しない新たなオペラホールとしての計画案は、文化としての音楽ホールの価値、評価を無にするものと思われる。時代に逆行するような開発ありきの設計は、バブルの反省が欠落した思想であり、いいかげんやめなければならない態度(姿勢)である。

■ 塚本由晴(建築家, 東京工業大学大学院准教授) + 貝島桃代(建築家, 筑波大学准教授)

建築の価値を社会構築の原資にできない日本を、いつまでも続けるわけにはいかない。土地はもう原資にはならないのだから。京都でそれができなければ、日本のどこができるのか。オペラは年一回も見れない。街並は毎日だ。

■中川武(建築史家, 早稲田大学教授, 早稲田大学総合研究機構・ユネスコ世界遺産研究所長)

京都もまた悪戦苦闘を強いられながらも、よく持ちこたえてきたその強力な後楯が京都会館であったと思います。前川國男が日本の近代建築を届けようとした矜持が最も清烈に実現されている代表作といっても良いのではと考えています。あれが岡崎の地にあり続けることができたので、京都はなんとか日本の宝であり続けているとさえ私は考えています。針の穴が崩れると危ないと思われれます。京都の人は誇りを持っているはずだし、日本人全体にとっても益々京都は重要なものとなっていくことは十分分かっているはずですが、時に、欧米の人だけでなく、アジア途上国の人からも、私たちの町を京都のように！という想いが寄せられていることを忘れてしまうことがあることが心配です。

■ 新居千秋(建築家, 東京都市大学教授, 「横浜赤レンガ倉庫」保存再生設計者)

これから保存あるいは保全かの問題が、日本中で起こると思います。特に戦後の建物は、その評価が社会的に(建築関係者以外も含めて)定まっていません。横浜の赤レンガ倉庫の場合、20年以上の歳月をかけて、横浜市、市民、建築家が話し合いました。当初、一人の新聞記者が頑張り、それに色々な人が続いたと聞いています。残念ながら、私達が赤レンガ倉庫に加わる前に、80%くらいの建物が壊されてしまい、最後の鉄骨造で海に対して並行に建っていた建築が、赤レンガ倉庫の着手の数年前に壊されました。また私達がレンガ倉庫に加わった時は、赤レンガ倉庫の評価は大関くらいということで、残してどうかという人もいましたし、その力を信じてやまない人達がありました。今度の前川さんの建物は、写真や勉強で見たことはありますが、自分が実際にどこまで詳しく知っているかという、ほんの少しと言わざるを得ません。ですから、あまり正確な意見は言えませんが、このコンペのプロポーザルを見た時、ものすごく期間が短く、また、やれる事務所を限定するような内容であり、1回目に誰も応募しなかったということは、ほとんど公表されず、今回調べますと、第2回目のものも、条件は少し緩和されましたが、入札参加資格を持っていないと駄目だというものでした。歴史的な建物をどう評価するかということでも、もっと時間をかけるべきだと思いました。

私達は、コンペに(このコンペだけではありませんが)対する疑問があります。最近のコンペは、内容が発表されてから提出が1ヶ月前後になり、どんどん短くなっています。また、特定の事務所しか応募出来ないものになっています。もし、役所の人達が、本当にこの建物をどうしたいのか、社会に問いたいのであれば、1年くらい時間をかけて議論をする場を設け、その間に色々な人を呼べば、知名度も上がるし、オペラも必要になるのであれば、技術的に解決できることもあると思います。赤レンガ倉庫の場合、90%以上のものを残す、また再び再利用の形で使われなくなったら、元に戻せるようにする。例えば、扉は壁の中に残し、現状に復帰した部分を使えるようにしました。外観は、ガラスのレストラン部分も取り外すことが出来、元に戻せるようにしてあります。プロポーザルで6ヶ月、民間と役所の協働で約1年半、200回くらいの打ち合わせをして、色々なところで、市民の代表の人達に説明しました。

私は、必ずしもオペラをやるということが悪いとは思っていません。また、すべての建物を残した方が良いとも思っていないが、なるべく議論を長くやって、人々の様々な意見を取り入れてやった方が良いと思います。また、設計者もそういうことが出来る人間を、実際にコンペ案を作る前にヒヤリングや実際の建物、建築後の評価(使用者に聞いて)を入れて、考え方を聞いて選ぶべきだと思いますし、また、1社だけでなく、色々な会社、色々な人を入れてやっても良いと思います。1-2年、着工が遅れたとしても、文化を失うよりは価値があると思います。議論を恐れずにやることは、長い眼で見た時、必ず良い結果を生むと思います。

■高橋晶子(建築家, 武蔵野美術大学教授)

京都会館は、前川先生の代表作のひとつであることに加え、疎水と連続したロケーションが重要な資源だと思います。時代精神の明確な表出を強く感じます。大学学部時代に、京都という都市について受けた講義のなかで、京都が1000年にわたりそのつど新しい文化を発信する場を創出してきたこと、明治に首都でなくなった危機感とともに、近代社会へ真っ先に乗り出すために疎水を建設したことを聞きました。伝統を古きよきものと思いでいた自分にはインパクトがありました。戦後、いよいよ市民が主役の社会が到来するにあたり、前川氏は自身が理想とした「公共性」を表象する空間を展開され、京都会館でも中庭広場をめぐる内外の空間でそれを表現しました。時代精神を空間化し定着することに成功した場所を訪れると、時代が変わっても、その時の気運を理解でき感動します。疎水と京都会館は、時代は違っても、現在に至る近代社会のビジョンを空間として体現したものとしてとらえたいと思います。

■広田直行(日本大学教授)

京都会館にオペラの機能が本当に必要なのか？再開発のいけにえにされているのではないのか。建築が生かされて使われる事は、重要である。まず、京都会館が市民ニーズに対して、どのように生かされるべきかの議論が有るべき。結論として搬入路等、改修は最小限にとどめるべきと考えている。政治的活動で名建築が失われることは、何としてもさげなければならぬ。

■遠藤秀平(建築家, 神戸大学大学院教授)

建築は、みんなの記憶の原点です。記憶を消すことはどういう意味か、話し合う必要があります。記憶のない人間とは、どのような存在か？人間の証明をなくしては、だめです。

■兼松紘一郎(建築家, DOCOMOMO Japan 幹事長)

もし仮に、京都という地にオペラの上演可能なホールが必要とされたとしても、この地に、京都会館の第一ホールを取り壊してつくることの是非から検討をはじめべきでしょう。市民のためのホールでしょうから、多くの市民の共感なしでこのプロジェクトのスタートをすべきでないと思います。続いて、もし仮に、裏社会の仕組みをとりはずせないとしたら、この京都会館のオーセンティシティを検証、大切にして、ホールを地下にもぐらせるなど、周辺環境を破壊させない大胆な技術・構想にトライすべきと考えます。

■松本哲夫(インテリア・デザイナー, 剣持デザイン研究所長)

設計者が決定したみたいですね。香山壽夫さんですか？色々方針が出ていますが、不快なことになってますね。

■ 林泰義(計画技術研究所長)

まちは時代の記憶を年輪のように美しく刻むことで、ひとびとをまち世界創造の共犯者へと誘うのではないのでしょうか。

■ 松村秀一(東京大学教授)

お役に立てませんが、どうぞ頑張ってください。応援しております。

■ 本杉省三(日本大学教授)

京都会館は学生時代に行ったきりで、実はあまり記憶がございません。オペラ…ですか…？香山先生が設計をやられると聞きました。基本設計だけの発注をどうして受けるんでしょうね？

■ 松原隆一郎(社会学者, 東京大学大学院教授)

9月に10日間、イタリアのトリノとミラノへ行きました。建築物の修復について学者の意見を聞くためです。彼らは「イタリアも日本も同じだ」と言いますが、程度が違いすぎる。やはり日本からすれば、イタリアの修復への共感にはすばらしいものがあります。京都会館の保存に賛成し、愚かな劇場建設に反対します。

■ 大宇根弘司(建築家, 元・日本建築家協会会長, 元・前川國男建築設計事務所々員)

困難な事に取り組んでおいでの皆様に敬意と謝意を表します。

■ 北尾靖雅(大学教員)

京都会館で「ぼちぼち」なおしてゆくという決断をする事が、本質的に京都の未来につながる文化を構築する常識的な道筋であると、ふつうの人々はすでに気づき始めていることに、今なら気がついて考えが変わっても、未来に後悔は遺らないでしょう。しかし、気がついていても考えが変わらなければ、そのことは未来に後悔、文化や社会にとっての負の遺産、を遺すことになることを危惧いたします。

■ 加藤信喜(畿央大学准教授)

先日、京都岡崎のあたりを歩きました。名建築が集まった京都の近代を象徴する場所だと改めて思いました。京都会館の前まで来ると、それまで普通に歩いていたのに何だか襟を正さずにはおれないという威厳を肌で感じ、思わず立ち止まってしまいました。それほど他とは違う風格のある建築です。相撲でたとえるなら少々古いですが双葉山のような、本当に立派なたたずまいに見えました。そして伝統ある京都に最もふさわしい建築といえるでしょう。これを壊すなどという発想がどこからきたのか信じられません。我々は尊敬すべき先人達が残した遺産を大切に守っていかねばなりません。3・11以降は特にそのことを肝に銘じ、もう過ちは繰り返さないようにしたいものです。

■ 坂本光弘(建築家, 江戸東京たても園ボランティアスタッフ)

前川さんの代表作の一つです。是非、残して欲しい作品です。弘前の様な事例も参考にしてもらいたいものです。微力ながら、応援お手伝いさせていただきます。

■ 太田隆信(建築家, 元・坂倉建築研究所大阪所長)

京都会館の事、なんとなく動きがあることが知っていましたが、それにしても、今回の世界的なオペラ上演可能なホールへの変身の話、寝耳に水、驚くべきというよりは唐突感があります。なぜオペラ座なのか、今のまま、音楽ホールではなぜいけないのか、そのあたり、もう少し詳しく説明していただきたい、議論があってほしい。これ迄から突然に、世界的な〇〇、本格的な〇〇という降って湧いたような提案があって、十分な説明もないまま実につまらない凡庸なものが出来上がってしまった、凡庸なものに建て替えられてしまったという例が、公共の施設にはあまりにも多すぎます。ここは慎重に議論をかさねたいものです。何といっても、時をかさねてこれほどに周辺景観と、見事にマッチして、今や京の風景のひとつと胸を張って言えるほどの近代建築はそうざらにはないですから。それにしても、この議論の中で耐震的な観点からの話がないのはちょっと不思議な気もします。そのあたりの説明もよろしく。

文化や芸術のためにならないホールの計画・ 地域のためにならない計画を考え直してください

京都市は「京都会館再整備基本計画」を策定し、京都会館第一ホールを解体・建替することを計画しています。この計画は、平成14年度から専門的な調査や検討委員会を経て準備されてきた改修計画と連続性がなく、利用者や専門家の意見を無視して策定され、公表と同時にその年度で使用受付を停止するなど、利用者への配慮に著しく欠けたものとなっています。また、「世界水準のオペラやバレエ」を可能とする舞台を備えたホールにすることを口実として、重要な文化財であり歴史的意義の高い京都会館の建築物を取り壊し、岡崎地域の景観に悪影響を与えるなど、文化や景観への理解に欠けた計画となっています。

さらに、これまで京都の文化を支えてきた地域の音楽・舞台関係者を無視して、海外の団体の来日公演に焦点を当てた計画となっている点、再整備後のホールでは自主制作を行わない旨が明言され、ホールの建設には多額の税金を投入するのに対し、演奏・公演活動には配分する姿勢が見えない点は、音楽と舞台芸術を愛する立場として、見逃すことが出来ません。また、進行中の「京都会館の建物価値継承に係る検討委員会」では専門家から施設のスペックを見直すように再三求められ、貸しホールとしての長期的な収支の見込みが全く考慮されていないなど、不備のある計画となっています。このように調査不足で関係者や専門家の意見を聞かずに強引に計画された施設は、建設後は、過大な舞台設備を備えた施設の維持管理に京都市の文化予算が侵食され、演奏・公演活動への財政的圧迫をもたらすことが予想されます。文化政策として問題の多いこの計画を白紙に戻して、関係者や専門家の意見を反映させた、客観的で長期的な視点に基づいた計画とすることを求める声明にご賛同ください。

呼びかけ人・連絡先 京都会館再整備をじっくり考える会 事務局 西本裕美
jikkuri.kyoto@gmail.com 090-3926-4329

音楽と舞台芸術を愛する立場から京都会館再整備基本計画を憂慮する声明

(1) 施設の建設ありきのハード先行の文化政策に抗議します。

京都会館のこれまでの利用者、京都や近隣の音楽・舞台関係者や専門家の意見を反映させ、京都の音楽・舞台芸術がいかにあるべきかというソフトの議論を先に行い、そのために必要な施設が計画されることを望みます。

(2) 演奏・公演活動への財政的圧迫につながるおそれのある過重な舞台設備を有する施設を、単なる貸し会場として作ることを、我々は歓迎しません。

(3) 海外の団体の来日公演ではなく、地域の音楽・舞台芸術関係者の育成のための計画を望みます。

お名前	ご住所	所属先・団体名(※)	公表可否

(※)「お名前(所属先・団体名)」の形式で、賛同者として公表する可能性があります。公表に同意される方は、公表可否の欄に○をしてください。送付先 FAX: 075-203-6449 (京都会館再整備をじっくり考える会)

2012年3月5日

京都市市会議員各位 様

京都文化団体連絡協議会

京都会館再整備に対する要望について

日頃は京都市政の充実にご尽力いただき、誠にありがとうございます。

京都会館再整備基本計画及び、現在進行中の基本設計案について、下記の通り要望いたしたく、議会での十分な論議をお願いいたします。

記

- 1 京都会館再整備基本計画については、市民の間で未だ論議が尽くされていません。現在予定されている第1ホール解体の予算案の採決は見送り、論議を継続してください。
- 2 文化的価値の高い京都会館の建て替え計画は見直し、第1・第2ホールともに速やかな内部改修をすすめてください。

声明

文化的価値の高い京都会館の建て替え計画は見直しせよ

2011年10月13日

京都文化団体連絡協議会

京都会館は、モダニズム建築の代表的な建築家で戦後の日本建築界をリードした前川國男氏の設計によって1960年、市民に親しまれる文化施設として開設された。同会館は、同じく前川國男氏の設計で同時期に建設された東京文化会館と共に日本建築学会長賞を受賞し、2003年にはDOCOMOMO Japanの「日本を代表するモダニズム建築100選」にも選ばれた日本の現存する代表的な近代建築物のひとつであり、文化施設としては東京文化会館と双璧をなすものである。

京都市は5月、京都会館の第一ホール部分を現在の27.5メートルから31メートルの高さのものに建て替えるとする「京都会館再整備基本計画案」を発表し、翌6月には正式決定したとされる。第一ホールの建て替えは、京都会館の文化的な価値を無視し、市民合意も得られておらず、断じて許されるものではない。

私たちは今日までも、道具の搬入や舞台演出上の設備の不備、会場の申し込み期間や利用時間、トイレの数が少ないことやバリアフリー化の問題など、実演家と観客両者の立場での様々な問題点を指摘し改善を求めてきた。特に、第一ホールについては、2000人規模の収容能力をもつホールが京都会館において他にない中、各種イベントでの演出方法の多様化、大型化に伴う設備の不備を指摘する声は多く、抜本的な改善は関係者の切実な願いになっている。京都会館の設備改善の必要性は論を待たない。そういった中、2005年から京都市は京都会館再整備検討委員会による再整備に向けた検討を開始し、私たちもその動きに注目してきた。

京都市が策定した「京都会館再整備基本計画」では、「耐震性能」「バリアフリー等」「観客の利便性」「ホール関係者の利便性」など、建物全体に関する課題や舞台の奥行き、高さなどホール機能等に関する課題も整理されており、検討内容は関係者の意見を一定反映したものとして評価できる。しかし、ここから導き出された「第一ホールの建て替え」という結論は、一企業の思惑が大きく働いた極めて唐突で異常なものと言わざるを得ない。

今回、ロームが50億円で京都会館のネーミングライツ（命名権）を獲得し、建て替え計画が急浮上した。ネーミングライツの売却は公募もされず、水面下で京都市とロームとの間で協議がすすめられたものであり、行政の公平性が問われる疑惑に満ちたものである。私たちは文化活動などに対する企業の社会貢献を否定するものではない。しかし、ネーミングライツの売却という行為自体、文化行政のあり方が問われるものであり、仮にそれを認めたとしても、企業は命名にかかる事柄以上のことを求める権利はないし、京都市はその他の要求に従う必要はない。今回の建て替え計画は、京都市が行政の主体性を放棄して一企業に屈服した結果と断ぜざるを得ない。こういった京都市の態度は、健全な文化の発展とは無縁なものであり、これを看過すれば、必ずや京都の文化行政は大きく歪んで行くに違いない。

京都会館は公共施設、すなわち市民の財産である。京都会館の再整備は、あくまでも京都会館の文化的価値を損なわない範囲で、つまり、建物については保存を前提として行われるべきであり、今回の計画については見直しを強く求めるものである。

以上

2011年8月22日

「京都会館再整備基本計画」に対する見解

新建築家技術者集団京都支部

はじめに

京都市は2011年5月、京都会館再整備について第一ホールの建て替えを含む全面改修の方針を打ち出しました。

地元住民をはじめ、多くの市民、日本建築学会をはじめとする建築関係の専門家から反対や疑問の声が上り、この問題についての市民的論議がようやく本格化しはじめた矢先のことでした。

新建築家技術者集団京都支部は、市民・住民の立場に立つ建築・まちづくりの専門家集団として、今回の京都会館第一ホール全面建て替えの決定について以下の通り問題点を指摘します。

1. 京都会館の改築によるオペラ上演は市民の要望ではない

京都市が京都会館再整備基本計画（以下「基本計画」）で第一ホールの全面建替えを打ち出した機能面の理由は「オペラや有名歌手の大規模なライブができる奥行きと高さを持つ舞台をつくる」と言うことにつきます。

京都にもオペラの愛好者はいるでしょう。有名歌手の大規模ライブを楽しみたいという人も多くいるでしょう。しかし、京都会館を無理やり改修して本格的オペラなどの上演が可能な大阪や滋賀のホールに肩を並べるものになるのでしょうか。本当にオペラやライブを愛好する人々の期待に応えられるのでしょうか。現在の「基本計画」案では、それは否と言わざるを得ません。

京都会館は竣工後50年を経た建物で、しかも時代の変化に合わせたメンテナンスが十分でないことも原因となり、楽屋の使いにくさ、トイレの数の不足や狭さ、バリアフリーの問題など、利用者にとって改善すべき課題が多くあり、これらの問題を改善しなければならないことは誰にも異論はありません。しかしこうした改善は改修によっても十分可能で、建替えの決定的要因にはなりません。公表されている京都会館再整備検討委員会（2005年7月～2006年12月）の論議の経過を見ても、現在の舞台の広さや高さ不足について、一部プロモーターからの意見はあるものの、オペラの上演は話題にさえなっていません。

ではなぜオペラなのでしょう。京都市の文書で最初にオペラ上演のことが現れるのは2010年7月に設置された「岡崎地域活性化ビジョン検討委員会」の第3回検討委員会に提出された中間報告（2010年12月）です。この中間報告で京都市ははじめて梅小路公園や京都国際会議場などと並んで、岡崎地域をMICE戦略の重点地域と位置づけ、その一環として京都会館でのオペラ上演を打ち出しました。

実はこのMICE戦略は、それに先立つ2010年9月、京都商工会議所「京都観光—10年後に向けての構造提案」（提言）の中心的な課題として提起されていました。

そこでは次のようにうたわれています。

「京都会館の立地する岡崎地区は、風光明媚な土地柄に加え、みやこメッセ、京都市国際交流館、国立近代美術館、平安神宮など、魅力的な要素が凝縮された地域です。京都会館を改修した

上で、各施設の管理窓口を一本化するなど、それぞれを連動させて利用しやすい体制を整えれば、他に比類ない世界水準のMICEゾーンにでき、なおかつ住民にも多くの利便を提供できる文化・交流ゾーンにもできるはずです。」

この二つの文書からは、自然と調和し近代以降の京都の歴史を刻みながら京都市民の文化・交流・スポーツの場として親しまれてきた岡崎公園と、その中心的な場のひとつである京都会館を単に観光資源としてのみ捉え、利潤追求の場に改変しようとする京都財界の身勝手な意図とひたすらその意図に従う京都市の姿勢が浮かび上がってきます。

京都市民は文化的、芸術的価値を投げ打ってまで京都会館を利益を生む場にしなければならぬほど貧しいのでしょうか。そんなことをすれば、それこそ京都市民の精神文化の貧しさを示すことになってしまいます。

京都会館は京都市民のもので、その再整備は「なおかつ住民にも」ではなく「何よりも市民のために」が出発点でなければなりません。いま重要なことは、私たち京都市民が京都会館を文化・芸術的活動の場としてどう活用していくのかを議論することです。再整備にとって根源的ともいえる論議はこれからです。市民の建物は、建設過程だけでなく、建設されてからの運営、維持管理、補修、改築なども「市民のもの」であり、「市民に開かれて」いなければなりません。

2. 日本を代表するモダニズムの建築として、その価値の核心が失われること

京都会館は戦後復興の象徴として、市民などからの資金の拠出も受け、指名コンペを経て、日本のモダニズムの建築家前川國男によって設計、1960年に竣工しました。

前川國男は20世紀を代表する建築家ル・コルビュジェにモダニズム建築を学び、日本の気候風土を踏まえたモダニズム建築を確立しましたが、京都・岡崎の自然や歴史への深い理解を踏まえて設計された京都会館はその契機となるものでした。

こうして京都会館は日本のモダニズム建築の歴史上、もっとも重要な作品の一つとなり、1961年には日本建築学会賞受賞、2003年には国際組織DOCOMOMO JAPANの日本のモダニズム建築100選にも選ばれています。京都における近代建築の中でも、重要文化財指定に値すると言われているほど文化的、芸術的価値の高い建築なのです。

京都会館の建築的価値の核心

私達は京都会館の建築的価値の核心を以下のように考えます。

一、高さを抑え、水平性を強調することで、自然や周囲の建物、街並みに調和していること

東山通りから二条通りを東へ進むと、東山の山並みを背景に、京都市民の文化・交流・憩いの場として親しまれてきた岡崎公園がゆったりと広がっています。

京都会館は、京都の自然の美を代表する穏やかな東山の山並みと、岡崎公園の南と西を直線的に縁取る京都近代化の象徴とも言うべき琵琶湖疏水の流れとが会うここ岡崎の地に建っています。前川國男は巨大なマスを置くことはこの地にふさわしくない、むしろ大切なのは自然や周囲の建物、街並みとの調和だと考えました。

彼は京都会館の外観を以下のようにデザインしました。

第一に建物の庇をできる限り低く抑え、深く、のびやかに連続させることで水平性を強調しています。

第二にこの庇とこれを支えるリズムカルに配列された柱・梁、その間を埋める透明で大きなガラス面、それとは対照的な独特な質感と色合いをもつ大型タイルによって、モダニズムの建築表現を用いながら、京都・岡崎の気候風土を踏まえた禅寺にも例えられる厳かな雰囲気表現しています。

第三に第一ホール、第二ホールの屋根を細心の注意を払って造形し、穏やかな東山の山並みに見事に調和させています。

京都会館の建築的価値の核心、自然、建物、街並みへの調和はこうして実現されました。

二、都市の中にあつて都市や自然に対して開かれた公共空間として高い質を達成

二条通に沿って建物と十分な距離を保たれたケヤキ並木の歩道を進むと、第二ホールと会議棟の間に広く十分な高さのピロティが現れます。このピロティが建物によってL型に囲まれた中庭への入り口です。

ピロティから北を望むと第一ホールの入口、それに続くホワイエ、さらにその北側の冷泉通りまで視線をさえぎられることなく見通すことができます。これによって、ホワイエと中庭の連続性、さらにはこの建物とその内外の空間全体が周辺の都市空間につながっている事を視覚化し得ています。中庭から東を望むと再び東山の山並みが見えます。振り返って西をのぞむと、そこには市民が開かれたレストランと、その上方に先ほどの第一ホール屋根が見えますが、それは隣接する京都市立美術館別館とも調和し、決して中庭に集う人々に威圧感を与えません。

こうしてこの中庭は市民が気楽に立ち寄り憩いのひと時を過ごす事のできる場として長く親しまれることとなりました。都市の中にあつて都市や自然に対して開かれた質の高い公共空間、すべての市民が開かれた公共空間は、戦後民主主義の精神の象徴ともいえるものです。

失われる建築的価値

ところが、「基本計画」に示された平面図、断面図から判断すると、改築計画は上記で指摘した京都会館の建築的価値の核心を継承するどころか、失わせてしまうものです。

最大の問題はオペラ上演を可能にするため第一ホールの高さが 30 メートル近くまで引き上げられ、巨大なマッサとなることです。これでは東山の山並みや周囲の建物、街並みと不調和な、周囲に威圧さえ感じさせるものになります。

開放的な中庭を中心とする空間全体が変質してしまうことも問題です。基本計画では第一ホールの玄関が二階に移り、現在の第一ホールホワイエにあたる部分はバックステージになるため南北の視覚的抜けは失われます。さらに第一ホールの屋根が中庭に対しても巨大なマッサとして立ち現われるため、隣接する京都市美術館別館との調和も失われます。これでは、都市の中にあつて都市や自然に対して開かれた質の高い公共空間を持つ京都会館の建築的価値は失われます。

3. 景観政策による高さ規制を超える問題

「基本計画」が新景観政策による高さ規制を超えること自体、重大な問題です。

京都市は4年前に、「これ以上の京都破壊を許さない」と言う市民の圧倒的な支持と協力を背景に新景観政策をスタートさせました。この政策によって、この間、さまざまな個別の論議はあるものの、基本的にはそれ以前のように高層建築物による居住環境の壊滅的破壊にストップをかけることができたと言えます。

今回の計画は、新景観政策を推進する先頭に立つべき京都市自身が建設主体となって行う事業であり、しかも市民全体が利用する建物です。軽々しく高さ規制を取り払うことは新景観政策を支持、協力してきた京都市民に対する背信行為であり、今後の京都全体の景観、まちづくりに大きな禍根を残すこととなります。

2006年12月の京都会館再整備検討委員会の意見書の結論を踏まえ、「既存建物の保存を前提とした改修」を進めれば、京都会館の建築価値を損なうことも、高さ規制に京都市自ら反し周辺環境を乱すこともありません。

4. 「基本計画」を白紙に戻し、市民的議論の十分な場と時間を

上記3つの問題点はひとつひとつがそれぞれに重要な問題であり、しかもそれぞれ関連しています。これらを議論し、市民的合意をつくりあげていくには十分な場と時間が必要です。

じつは、京都会館再整備にとって最も重要な論点である上記3点について、京都市自身も今後も論議が必要だと気づいているようです。

「基本計画」の「V-2 今後の課題」には、「今後、周辺環境や景観への影響やデザインと施設機能とのバランスについてシミュレーションを行いながら、建物価値の継承に配慮し、ホールの機能や法的な建物の要求性能を確保する基本設計案の策定が求められる。」と記されています。「基本計画」を締めくくるこの指摘は、京都市自ら「基本計画」にかかわる根本的問題が未解決だとの認識に立っていることを表明したものであり、このような状況のままプロポーザルによる設計者の選定、実施設計、建設へ突き進むことは市民に対して無責任な態度と言わざるをえません。

私たち新建築家技術者集団京都支部は、「基本計画」を白紙に戻し、十分な時間をかけて市民的議論を徹底的に行うことを要望します。

[HOME](#) > [ニュース](#) > [社会](#) > [京都会館建替え中止求める要望署名7600人分提出](#)**「脱原発」へ緊急発売 創刊50年記念事業**「続・原発撤退めざして」
申し込み **200円**冊子「1から分かる原発問題」
申し込み **300円**DVD「1から分かる原発問題」
申し込み **900円**

社会

2012年1月 7日 17:17

京都会館建替え中止求める要望署名7600人分提出

京都市が進める京都会館(左京区岡崎)建て替え計画に対し、地元住民や建築家らでつくる5団体が6日、建て替え計画の中止や岡崎の景観保存を求める署名合計約7600人分を門川市長に提出しました。建て替え計画に必要な岡崎一帯の高さ規制緩和案が、市都市計画審議会(20日開催)で審議されることを控え、行われたもの。



「京都・まちづくり市民会議」、「岡崎公園と疏水を考える会」、「京都会館を大切に作る会」、「京都会館再整備をじっくり考える会」、「左京まちづくり連絡会」が、○日本を代表するモダンイズム建築の代表、京都会館の保存○岡崎公園一帯の景観の維持○高さ規制緩和案の撤回一などを要望しました。

「市民会議」の事務局代表の中島晃弁護士は「5団体がそろって要望したことを、市は重く受け止めるべきだ」と訴えました。

ツイート 92

おすすめ 12

市民が選ぶ文化財 「京都会館」

所在地	京都市左京区岡崎最勝寺町
竣工年	昭和35年(1960年)
構造規模	鉄筋コンクリート造地上4階地下1階
設計者	前川國男
所有者	京都市
顕彰者	京都会館を大切にする会 岡崎公園と疎水を考える会 京都会館再整備をじっくり考える会 左京まちづくり連絡会

選考理由

京都でも屈指のビューポイント、岡崎公園の疎水端に、京都市民であれば誰でも知っている、一度は訪れたことがある、また平安神宮への道すがら、モダンでありながら和風を感じさせるその建物を記憶している観光客の方々も多いのではないかと？そういう心に残る建物が京都会館です。戦後もようやく落ち着いた1960年、市民の集える施設として、また日本で唯一公共団体が運営する京都市交響楽団の本拠地として建設されました。設計の前川國男氏はル・コルビュジェに師事された、日本のモダニズム建築の第一人者です。敷地の特性をよく考え、ここ京都では建物の高さをできるだけ低く抑えることに成功しています。外観はモダニズムスタイルらしいコンクリート打放しの柱・梁と低く抑えた軒の高さに、和を感じさせる深いひさしが影を落としています。中庭に立てば、視線は建物を透かして外へと導かれ、大きな建物の威圧感を感じさせません。内部は多目的な用途を盛り込み、多用な使い方のできる仕掛けを持ったおもちゃ箱のような楽しさに満ちています。

京都市はこの京都会館を改築するにあたり、第一ホール部分を高くして周囲との調和を無視し、オペラ公演のできるホールを謳って市民の使い勝手を無視する改築案を強行しようとしています。今回顕彰させていただく上記の方々はこのような状況を憂慮し、私たちと共に京都市にもう一度改築案を考え直すよう活動されており、その一助として私たち京都の近代建築を考える会にできることを行いたいと考えました。

このように、街の風景として市民のみならず観光客にも記憶される貴重な近代建築「京都会館」は、私たち近代建築を愛する市民が「市民が選ぶ文化財」として顕彰するにふさわしい建築であり、ここに選定致します。

2012年1月29日 京都の近代建築を考える会

「市民が選ぶ文化財」選定要項

(趣旨)

近年京都においても多くの近代建築物がその姿を消し、建築文化やまちの景観が失われている状況がある。権威に依拠せず、市民が自発的に考え、様々な見極める力を育て合いながら、自ら意思表示しようとするものである。

(意義及び目的)

この要領は、京都市内にあり続けてきた近代建築物で、市民生活において重要であると考えられるものについて、これらを明らかにし、市民が認識を高め合う中で、身近に建築文化を享受できる豊かな生活環境の維持継続に寄与することを目的とする。

(定義)

この要領においてそれぞれ各号に定めるところによる。

- (1) 「市民文化財」 市民的価値を有する建造物で市民が選ぶ文化財
- (2) 「市民」 職業等をこえて日々生活をおくる人たち
- (3) 「近代建築物」 明治期以降に建てられた建物

(選定)

「京都の近代建築を考える会」が京都市内に存する近代建築物のうち、市民的価値を有するものを市民文化財に指定する。

(選定の基準)

市民的価値を有するものとは次の(1)から(3)までのいずれにも該当するものをいう。

- (1) 「愛着を覚える」
- (2) 「敬意を表する」
- (3) 「建築力が迫ってくる」

(所有者等との関連)

選定をしようとするときは、あらかじめ、所有者等の同意を得る。

(公共文化財等との関連)

文化財保護法及び京都府・市文化財保護条例の規定により文化財に指定されたものを除く。

(標識の贈呈)

『会』が交付する標識を所有者等へ贈呈する。

(選考委員会の設置)

『会』に所属する会員において委員を構成する。

「市民が選ぶ文化財」選定一覧

- 第一回（2004年5月選定） 旧・家邊徳時計店
- 第二回（2005年6月選定） 高野第3住宅集会所
- 第三回（2006年月選定） セカンドハウス西洞院店
- 第四回（2007年5月選定） flowing KARASUMA（旧山口銀行京都支店）
- 第五回（2008年6月選定） 壽ビルディング
- 第六回（2009年5月選定） 日本聖公会 京都復活教会
- 第七回（2010年5月選定） バザール・カフェ
- 第八回（2011年6月選定） 先斗町歌舞練場